

「男、突っ走る！」

第84回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (23)

『オフィスツリーイン』代表

国枝 佐代子 (58)

市民映画プロデューサー

山中 敦夫 (43)

劇団主宰者

本村 晴臣 (54)

音楽プロデューサー

橋崎 悟 (48)

WEB会社社長

野倉 浩平 (21)

『スリジエネ』メンバー

藤田 昇平 (21)

『スリジエネ』メンバー

前川 啓司 (29)

『スリジエネ』メンバー

山森 直海 (18)

『スリジエネ』メンバー

富永 美茜 (22)

『スリジエネ』メンバー

佐藤 美央 (21)

『スリジエネ』メンバー

大坂 美央 (16)

『スリジエネ』メンバー

花坂 美忍 (23)

『スリジエネ』メンバー

熊瀬 怜奈 (17)

『スリジエネ』メンバー

河辺 真恵 (21)

『スリジエネ』メンバー

長野 優美 (17)

『スリジエネ』メンバー

阿川 緑 (29)

阿川の妻、オーディション参加者

麦沢 梨花 (19)

オーディション参加者

坂本 寿梨 (19)

オーディション参加者

1 中央交流センター・ラウンジ

雅也、佐代子、山中、橋崎、浩太、茜
が会議をしている。

雅也「今日から新体制ということで、運営会議には新リーダーであるとみーと、副リーダーのコウタにも参加してもらおうことになりました」

茜「よろしくお願ひします」

浩太「よろしくお願ひします」

雅也「では、早速次第に沿って話をしていきたいと思います。まず二期生募集についてです。現状SNSやホームページ、チラシ配布で告知をしていますが、何か問い合わせはありましたか？」

橋崎「今、ホームページには一件問い合わせがありました。ただ、その前に一つ、総務的なことで提案があります」

雅也「何でしょう？」

橋崎「これから、『スリジェネ』が団体組織として規模を大きくするのであれば、組織

としての規約があつたほうが良いと思うんですが」

雅也「規約？」

橋崎「例えば、会計処理をどのようにするか、組織の役割や体制をどのように決めるのか、明確なルールの必要なものが必要になるんじゃないでしょうか」

雅也「確かに、これから二期生だけじゃなく、三期生などメンバーが増えていけば、組織としてのルールはちゃんと書面にしたほうが良いかもしれませんね」

佐代子「ルール作りは大事かもしれませんが、ど、それよりもまずは、メンバー募集に力を入れた方が良いと思います。ルール作りは、二期生メンバーが決まってからでも、遅くはないと思いますけど。それよりも、まずは一刻も早く告知をしたほうが良いでしょう。参加者がどれだけ集まるか分からないんですから」

橋崎「……」

雅也「総合プロデューサーの国枝さんの判断ならば……。分かりました、では規約の作成は一旦後回しにして、メンバー募集を優先しましょう」

橋崎「はい」

山中「告知サイトみたいなのところにも、宣伝してみても良いかもしれないですね」

雅也「（橋崎に）橋崎さん、サイトへの投稿、お願いできますか？」

橋崎「分かりました」

雅也「では、次ですが、ショウが十一月末に行われる舞台公演のオーディションに参加したいという相談があった件ですが、これについてはどうでしょうか？ 僕としては、せっかく本人が出演してみたいと言ってるので、問題なくオーディションに参加させてあげても良いと思っておりますが」

佐代子「市民演劇祭の稽古に、影響はないの？」

雅也「え？」

佐代子「本人の意思を尊重して、オーディションに参加させてあげるのは良いけど、もし合格したら、こっちの稽古に影響は出ないかしら？　いくらよその公演に出演するとは言っても、ショウは『スリジエネ』のメンバーだから、本家のスケジュールに影響を及ぼすのは、どうかと思うけど」

雅也「それは……」

険しい顔でお互いの顔を見合う茜と浩太。
太。

2 ファミレス

ランチをしている茜と浩太。

浩太「普段からあんな感じなのかな？」

茜「何が？」

浩太「運営会議」

茜「ああ……」

浩太「うちーがどんなに賛成意見を出しても、結局国枝さんが否定したら、意見が覆るわけだろ。あれじゃ、ただのワンマンじ

やないか。うちーが意見言ったり、ま
めたとしても、全然意味がなくなってるじ
やん」

茜「こんなんで、演劇祭できるのかな」

浩太「あれこれ口出すからな、国枝さんは」

茜「何か上手く行く気がしないんだけど、私」

浩太「同じく」

3 木内家・雅也の部屋

雅也がスマホで、昇平と話している。

雅也「うん。それで、運営会議で話し合った
結果、オーディションへの参加はダメって
ことになった。うん……ごめんね。俺とし
ては、全然オーディションには積極的に参
加してもらいたかって思ってたんだけど、
運営全体で決まったことだから、それを覆
すわけにもいかなくてね。本当に申し訳な
い」

昇平の声「いや、別にうちーが謝る必要は
ないよ。それが、組織としての決定だった

ら、まあしょうがないから」

雅也「シヨウは経験豊富だから、ちよつと稽古が被つても問題ないって思ってたんだけど、なかなか簡単にはいかなくてね」

昇平の声「そんなんで、運営大丈夫なのか？」

雅也「え？」

昇平の声「全体LINEで、国枝さんから、自分が総合プロデューサー専任になって、うちーがメンバーじゃなくて代表専任になるって連絡あつたけど、そういうのって稽古とかでみんなが揃ったときに、直接言うものなんじゃないのかな」

雅也「……」

昇平の声「一方的に代表変わりましたよろしく、って言われても、何も聞かされてないこっちからしたら、え？って感じなんだよな。うちーが悪いというか、運営としてそういうやり方はどうなのかなって、ちよつと思つたから」

雅也「そっか……。いや、意見言ってくれて

ありがとう。補足みたいにはなっちゃうと思うけど、次の稽古で改めて挨拶と連絡はするから。うん、じゃあ今週末の稽古で。

それじゃあ」

と、電話を切ると、大きなため息をつく。

4 南公民館・全景

5 同・大会議室

雅也、佐代子、山中、浩太、昇平、啓司、直海、茜、麻美、美央、怜奈、優

美が集まっている。

佐代子「今日は、レイコ、シノブ、マリエが欠席ですが、『七夕物語』以来久しぶりの稽古で、顔を揃えたので、まずは運営から連絡をします。全体LINEでもお伝えしましたが、新体制として私が総合プロデューサー専任になり、それに代わってうちーが代表専任となりました。（と雅也に）

「うっちー」

雅也「はい。この度、『スリジェネ』の代表を務めることになりました。まだまだ経験は浅いですが、精一杯頑張ります。代表となりましたが、『スリジェネ』のうっちーには変わりはないので、今まで通り『うっちー』と気軽に読んでもらえたらと思います。改めて、よろしく願いします」

佐代子「それから、九月末のハルさんとの歌唱ライブをもって、アサミンがメンバーを卒業することになりました」

麻美「はい。短い間でしたが、みんなと一緒に活動できて本当に楽しかったです。残りあと一ヶ月と少し、よろしく願いします」

佐代子「うっちーが代表になったことと、アサミンが卒業することに伴って、メンバーリーダーと副リーダーは、とみーとコウタが務めることになりました」

茜「うっちーに代わって、リーダーをすることになりました。よろしく願いします」

浩太「アサミンに代わって、副リーダーをします。慣れないこともあると思いますが、よろしくお願いします」

佐代子「では、ここからはうちーに」

雅也「はい。では、今後の稽古スケジュールについて簡単に説明します。九月末までは、夕方までを演劇祭の稽古、夕方から夜までを歌唱ライブの稽古にします。十月からは終日、演劇祭の稽古になります。各稽古で、どんな内容にするのかは、今後また決めたうえでご連絡しますので、よろしくお願います」

山中「じゃ、稽古の前に準備運動しよっか」
一同「はい」

6 中央交流センター・全景

N 「九月上旬、二期生メンバーオーディションが開催され、三名の方が参加されました」

7 同・会議室

審査員席に座っている雅也、佐代子、山中——受付席に座っている茜と浩太。記録写真を撮影している橋崎。

審査員席の前の椅子に座っているオーディション参加者の阿川緑（29）、麦沢愛花（19）、坂本寿梨（19）。

それぞれの自己紹介をカットインで。緑「阿川緑です。豊田の劇団に夫と一緒に所属しています」

× × ×
愛花「麦沢愛花です。大学一年生です。演劇が大好きで、学校の演劇サークルに所属しています」

× × ×
寿梨「坂本寿梨、大学一年生です。演劇の経験はないんですが、ミュージカルや歌うことが好きです」

× × ×
オーディション終了後。
審査会議をしている雅也、佐代子、山

中、橋崎、茜、浩太。

N 「審査の結果、今回の三人も全員合格ということになった」

8 南公民館・大会議室（翌週）

雅也、佐代子、山中、浩太、昇平、直海、茜、美央、忍、優美、緑、愛花、寿梨が集まっている。

N 「翌週の稽古から、二期生メンバーの三人が合流しました。ですがその一方で、『七夕物語』本番終了以降は、仕事や個人の予定を優先するメンバーが増え始め、メンバー全員が顔を揃える機会はなかなかありませんでした」

雅也 「今日から、『スリジェネ』のメンバーになった三名が、一緒に稽古をすることになりました。（と緑たちを見て）では、一人ずつ自己紹介お願いします」

緑 「阿川緑です。主人が『スリジェネ』の振付をしていたことがきっかけで、私も『七

夕物語』を見させていただきました。すごく楽しそうで、元気なメンバーの皆さんとご一緒できることを嬉しく思います。よろしくお願いします」

一同、拍手をする。

愛花「麦沢愛花です。気軽に『むぎ』と呼んでください。よろしくお願いします」

一同、拍手をする。

寿梨「坂本寿梨です。演劇は初めてですが、ミュージカルや歌うことが大好きなので、ぜひ仲良くしてください。よろしく申し上げます」

一同、拍手をする。

× × ×

台本の読み合わせをしている一同。

N「その日の夕方までは、演劇祭に向けて、僕が執筆した脚本の読み合わせでした。しかし、演出経験もなく演技経験が一度しかない僕は、具体的な演技指導らしいものがない、どんな風に読んでほしいのかとい

う程度の指定しかできませんでした」

9 同場所（夕方）

台本の確認をしている雅也。

帰る支度をしている昇平——菓子パン
を食べている愛花。

昇平「まさか、むぎが『スリジエネ』に入る
なんて思わなかったよ」

愛花「興味本位でオーディション受けたの。
まさか、メンバーに入るなんて思わなかつ
たけど」

昇平「俺がいるの分かってたんだろ」

愛花「何かのグループに入ってることは知っ
てたけど、こことは知らなかった」

昇平「本当かよ」

雅也「あれ、ショウってむぎと知り合いだつ
たの？」

昇平「名古屋の演劇ワークショップで、何回
も一緒になったことがあるんだよ」

雅也「へえ、ショウそういうところにも通つ

てたんだ」

昇平「演劇バカだからな、俺は」

愛花「シヨウ。代表に、そんな口のききの方

して良いの？」

昇平「だって、元々メンバーだったんだから、

うちーは」

愛花「え、そうなんですか？」

雅也「うん。運営が新体制になったから、俺

はメンバーではなくなったんだけど、『ス

リジェネ』の人間であることに変わりはない

からね。だから、むぎも変に他人行儀に

ならなくて良いからね。気軽に、『うち

ー』って呼んでもらえれば」

愛花「分かりました」

昇平「じゃあ、俺はこれで。お疲れ様（と出

ていく）」

雅也「お疲れ。（と愛花に）夕方からは、ラ

イブの歌唱稽古になるんだけど、愛花どう

する？ 見学してく」

愛花「はい、せっかくなので」

雅也「分かった」

と、麻美が入ってくる。

麻美「お疲れ」

雅也「ああ、アサミン。(と愛花を見ながら)

二期生メンバーになった、むぎ」

愛花「むぎです、よろしくお願ひします」

麻美「アサミンです。今度のライブで卒業し

ちやうから、短い間だけどよろしくね」

雅也「演劇経験者なんだって」

麻美「あ、じゃあ私の後任ってわけだ」

愛花「いえいえ、そんなことは」

と、電子ピアノを背負った本村が入っ

てくる。

本村「おはよう」

雅也「おはようございます」

本村「あれ、みんなは？」

雅也「今、コンビニ行ってます」

本村「了解。今日は夜まで、僕の歌唱稽古で

良いんだよね？」

雅也「はい。終わるまで、僕もいますので、

何かあったらいつでも」

本村「分かった。どう、最近？ 運営の代表には慣れた？」

雅也「とんでもない……。なかなか上手くい
かなくて……。運営の代表がこんなにも大
変だとは思いませんでした」

本村「まあ、これは仕事ってわけでもないか
らね。変に気負いせずに、のびのびとやれ
ば良いんだから」

雅也「はい……。」

× × ×

本村のピアノに合わせて歌っている直
海、茜、麻美、美央、忍、怜奈、優美
——見学をしている雅也と愛花。

10 同・廊下

自販機でジュースを買っている雅也—
—疲れ切った顔をしている。

直海、美央、怜奈がやってくる。

雅也「あれ、歌唱稽古は？」

直海「今、アカネとシノブとユミがやってるから。私たちは休憩」

雅也「そっか」

直海「うっちー、疲れてるね」

雅也「え？」

直海「そういう顔してる」

雅也「……」

美央「何かあった？」

雅也「いや……演劇経験の浅い人が、演出な

んてするもんじやないなと思ってさ」

怜奈「今日の読み合わせのこと？」

雅也「うん……」

怜奈「まあ、最初はそんなもんでしょ。でも、読み合わせしてる間は、楽しかったよ」

雅也「そっか……」

直海「代表になって、うっちーもいろいろプレッシャーを感じてるんでしょ」

雅也「まあね……」

直海「今度の作品は、うっちーが演出なんだから、うっちーが正解だと思ったものを、

私たちに伝えてくれたら良いんだよ。それが、演出なんだから」

雅也「うん……」

11 喫茶店

雅也、佐代子、山中が話している。

山中「うっちーとしては、これからどういうスケジュールでいる予定？」

雅也「スケジュールですか？」

山中「どれぐらいで音響のデータを決めるのか、台本外しはいつからなのか、通し稽古はいつからやるのかとかさ」

雅也「それは……」

佐代子「うっちーの中で、まだそこまでのイメージが全くできてないんでしょ」

雅也「……」

山中「うっちーを手伝いたい気持ちはやまやまだけど、演劇祭は俺の劇団も出るから、ずっと付きっ切りでこっちの面倒も見れないんだ」

佐代子「私はあくまで総合プロデューサーだから、現場を回すのはうちーなんだよ」

雅也「……」

佐代子「市民演劇祭の台本、ベンチに座るシーンがあっただけど、そのベンチって舞台のどの辺りに置いてあるイメージ？」

雅也「えっと、それは……」

佐代子「まだ舞台の画が浮かんでないんだね」

雅也「……」

山中「演出助手を、つけたほうが良いかもしれないな。舞台の経験をしてる」

佐代子「メンバーで言うと、経験値豊富なのは、ナオとミドリとショウですね」

山中「一層のこと、ミドリさんの旦那さんである阿川さんに来てもらったほうが良いかもしれないな」

佐代子「夫婦で一緒だったら、いろいろ機転も利きそうですしね」

雅也「……」

山中「あと、大道具のこともそろそろ考えた

方が良いかもしれないな」

雅也「大道具ですか？」

山中「知り合いの団体は、木箱を何箱も用意して、それを机だったり椅子だったり、いろんなものに見てて表現してる。今後、演劇やるんだったら、そういうのも用意しておいて損はないと思うけど」

雅也「箱ですか……」

佐代子「先月から、参加費もらうようにしたでしょ。そこから、箱を作る予算確保できないかしら？」

雅也「一度、予算組みしてみます」

佐代子「お願い」

山中「演出助手の件、俺からミドリさんや阿

川さんに相談してみます」

佐代子「お願いします」

ずっと山中と佐代子が話しているのを、
一人黙って聞いている雅也。

つづく